## 青年期の恋愛観を規定する要因に関する研究

○村上友希・岩永誠 (広島大学大学院人間社会科学研究科)

## 【序論・研究目的】

恋愛に関する代表的な理論に、Lee (1977) の恋愛の6類型がある。恋愛の6類型は、アガペ (献身的な愛)、ルダス (遊びの愛)、マニア (狂気的な愛)、プラグマ (実利的な愛)、エロス (熱愛的な愛)、ストルゲ (友情的な愛) からなる。これらを規定する要因として、関係規範、自己愛傾向、愛着が考えられる。しかしそれらがどのように影響を与えているのかは明らかにされていない。本研究では愛着、関係規範、自己愛傾向が恋愛の 6類型に与える影響を検討することを目的とする。

愛着とは、見捨てられることへの不安である関係不安と、受け入れてもらえないことから親密になることを回避する親密性回避の2つに分類される (Bartholomew & Horowitz, 1991)。また、親密性回避はアガペと負の相関があり、関係不安はマニアと正の相関があるなど、恋愛との関係も示されている (金政・大坊、2002)。このことから、親密性回避がアガペを抑制し、関係不安がマニアを促進すると考えられる (仮説①)。

関係規範とは、親密な関係における恩恵の授受の規則である (Clark & Mills, 1979)。関係規範とは、相手の必要に応じて恩恵を提供する共同規範と、衡平性を重視する交換規範に大別される。相手に献身的な行動をとる共同規範がアガペを促進し、打算的な考えをする交換規範がプラグマを促進すると考えられる (仮説②)。

思春期に自意識が高まることである自己愛傾向も恋愛の6類型と関係することが示されている(小塩,2000)。自己愛傾向は、自己顕示性を特徴とする誇大性と、他者の反応への敏感さを特徴とする過敏性の2つに大別される。誇大性はルダスやエロスと正の相関が示されていることから(小塩,2000)、誇大性はルダスとエロスを促進すると考えられ、相手の評価に敏感になる過敏性はマニアを促進すると考えられる(仮説③)。

## 【方法】

**参加者**: 恋人のいる 137名 (男性 62名, 20.61 ± 0.13歳, 平均交際期間: 16.80 ± 1.15 カ月) **質問紙**: ①教育用簡易版恋愛感情尺度, ②成人愛

着スタイル尺度,③共同規範および交換規範の遵守傾向の個人差を測定する尺度,④評価過敏性一誇大性自己愛尺度を用いた。

## 【結果と考察】

重回帰分析:恋愛の6類型を目的変数,愛着スタ イル、関係規範、自己愛傾向を説明変数とした重 回帰分析を行った。その結果, アガペは共同規範 に促進された。ルダスは親密性回避に促進され, 共同規範に抑制された。マニアは交換規範,関係 不安, 評価過敏性に促進され, 親密性回避に抑制 された。プラグマは評価過敏性に促進された。エ ロスは共同規範に促進され, 親密性回避に抑制さ れた。重回帰分析では主に共同規範と親密性回避 の効果が見られた。交際中に問題になりうるルダ スは親密性回避の促進効果と, 共同規範の抑制効 果を受けていた。一方,一般的な愛に近い愛とさ れるアガペ・マニア・エロスは逆の関係性を示し ていた。このことから, 恋愛の安定した構築や維 持には、相手のために行動するという規範意識と、 恋人が自分を受け入れてくれると思う傾向が重 要な役割を果たしていると考えられる。

表1. 恋愛の6類型を目的変数とした重回帰分析

変数名	アガペ	ルダス	マニア	プラグマ	エロス
交換規範	.087	.118	.192 *	.064	.016
共同規範	.395 **	173 *	.013	.086	.174 +
親密性回避	060	.393 **	267 **	038	394 **
関係不安	.125	025	.225 *	.061	.003
評価過敏性	098	.109	.180 +	.187 +	003
誇大性自己愛	050	.100	.037	.075	.075
$R^2$	.212 **	.258 **	.207 **	.059	.236 **

媒介分析: 親密性回避は共同規範を媒介してアガペを促進していた。この結果から, 恋人が自分を受け入れてくれると思うことが, 恋人のために行動するという規範の強さにつながり, 献身的な愛が高まると考えられる。関係不安が, 評価過敏性を媒介してマニアを促進していた。この媒介分析の結果から, 恋人に見捨てられるかもしれないという不安が, 対人関係一般において評価を気にしすぎる傾向を強め, 恋人に激しい感情や嫉妬深さを抱く愛を強めると考えられる。

